

岩手医科大学歯学会二十周年記念行事によせて

鈴木 隆

このたび歯学会幹事並びに20周年記念事業実行委員会のご尽力により、歯学会創設20周年を節目に記念事業が計画される運びとなったことは誠に意義深く、喜ばしい限りであります。

顧るに歯学部創設の頃、各講座の学問的水準を維持するために、学内で自分達の症例や研究活動を発表し合って切磋琢磨し、相互に知識交流を目的とする歯学談話会が発足（昭和41年4月）して以来、72回（昭和51年3月）の例会を重ね、それが発展的に解消されて岩手医科大学歯学会設立総会が举行されたのは昭和50年11月のことでした。初代会長に冨沢万之助歯学部長が就任されました。それから星霜20年、同じ学窓の中に在りながら、専門を異にし、環境や研究目的を異にする会員が一堂に会し、共通の話題で話し合うことは知識の交流のみならず、人間そのものの触れ合いを深めた点で、本学会の果たして来た役割は貴重なものであったと云えましょう。その後、大学院歯学研究科の院生の学位論文発表機関誌として、そして学位審査の概要の掲載誌として果たした責務は大きいと云えましょう。そして歴代編集長を軸に、より良き雑誌の刊行に努めるうちに何時しか20周年を迎えたことに深い感慨を覚えます。

一方、現実には眼を向けると21世紀を迎えて、高齢化社会から高齢社会に突入しようとする昨今、こうした社会的時流は学会に対し、時代性に適合した歯科医学の研究、進歩した実践医療の在り方を模索する使命を与えているものと思われれます。

この様なときに日本の医事評論の第一人者であられる行天良雄博士（NHK解説委員）を特別講演の講師としてお迎えでき、「歯科医療のこれから」と題してお話を伺えることは時宜を得た講演であると受け止めております。行天博士は厚生省医療審議会委員、医道審議会専門委員、日本医師会医療政策会議委員など沢山の要職にあられるにも拘らず、我々に極めて卓越した新しい医療の指針を明示して下さるものと信じて疑いません。

また、シンポジウム「歯科医療における quality of life を考える」を企画したところ、副会長石川富士郎教授（歯科矯正学講座）をモデレーターとし、甘利英一（小児歯科学講座）、上野和之（保存学第二講座）、田中久敏（補綴学第一講座）の三教授をシンポジストとして、さらには箱崎守男（岩手県歯科医師会専務理事）、佐藤政直（元盛岡市歯科医師会副会長）の両先生からもご協力をいただくこととなりました。歯科臨床医学にQOLの問題を取り上げることは時代の要請に叶ったことであり、会員の皆様の実践医療に役立てば幸いと存じます。最後に仕事の分掌を遺漏なく全うして下さった20周年記念事業実行委員（坂巻、石川、野坂、名和、太田、久保田、石橋、工藤、戸塚、城、亀谷）の方々に満腔の謝意を表したいと存じます。また第一期生の美挙が本企画の発想、推進力となったことも特筆に値し、これを機に、今後岩手医科大学歯学会が益々発展することを祈念して記念事業の挨拶と致します。

（本学会会長；20周年記念事業実行委員長）